

池へと向かうネパントラ

「ここは人の入らないところだからな」と父は言った。あたりにはだれもいなかった。天井のない地下室のような場所だった。

池の反対側はゆるやかな土手になっていて、そこから林が近づいていた。すぐ背後までクマザサと葛が生い茂り、わたしたちが体を動かすたびに大げさな音をたてた。

二つ目の釣り場だったので、日はすでに傾いていた。その前には川で釣ったが、水量がすくなく、釣果もなかった。川からしばらく歩いて森に入り、ゆるい坂をのぼった。わたしは父のあとを歩きながら、森の明るいとまっ黒なところが交差しながら現れるのを見ていた。

周囲は土手と、その先のひくい山に囲まれている。

父とわたしはコンクリートの擁壁に腰かけていて、その数メートル下に水面があった。水は暗く、重たく、静かだった。そのへりを囲むように枯れ葉が浮いていた。

水が流れるような低い音がどこからかずっと聞こえていた。

その池に近づいたのはじめてだった。池ならほかにもいくつもあったし、フェンスを越えなければならぬような場所に子どもはあまり近づかない。

空気は湿っていて、秋の冷たさがあった。

座って足元を見ていると、ときおり水面が動き、すぐにどこかへ吸い込まれるように消えていった。

もしここが遺跡だと言われれば、そのまま信じていた。わたしたちは遺跡に座って、釣りをしているのだと。わたしにはそこが普通の貯水池とは違うように思えた。わたしたちは釣りと旅をくり返しながら、ようやくその池にたどり着いたような気分だった。

父はいつもあまり説明をしなかった。

病室はしずかだった。ベッドのうちの三つは空いていて、残りの二人は眠るか、スマートフォンを触るかしていた。

父はベッドに横たわり、顔を窓のほうに向けて眠っていた。真っ白になりかけた父の髪は、日差しのせいでよりいっそう白く見えた。

腕のわきからはイヤフォンのコードが伸びて、サイドテーブルのスマートフォンにつながっている。わたしはイヤフォンをまとめて、テーブルに置いた。

ベッドわきにあった椅子に座ると、窓のすぐ向こうには病院のもうひとつの棟と渡り廊下が見えた。

父が目覚めるまで、わたしはニュースを読んだり、ネットを眺めたり、持ち歩いてきた本を読んだり、父が持ち込んだ本のタイトルを眺めたり、外の景色に目を向けたりした。

病院の駐車場から伸びる道が大きな道路につながっていて、その車の流れからわずかに走行音が聞こえてくる。風はなく、人影もほとんどなかった。

「父さんが子供のころ」と父は眠ったまま、前触れもなく、いつものようにゆっくりと話しはじめた。

「父さんが」のところで、わたしはポケットのスマートフォンを手にとってサイドテーブルに置き、録音をスタートさせた。

父さんが子供のころ、川が氾濫しるところまで水かさが増して。

それで水がひいたあとに河原に大きな、両手をひろげたぐらい、いやもっと大きな魚が横たわっていてな。暗い、灰色の、いかにも重たそうな魚だった。

父さんはそれを川沿いの道で、そこはちょうど通学路だったから、行きに見つけて、帰りにもまだそこにあるのを見ながら帰ったのを覚えてるな。まだだれも気づいてないんだって。

つぎの日の朝、魚はまだそこにあった。橋からすこし離れていたから、人目につきにくかったのかもしれない。

食べてもいい魚かどうか、わからなかったけどな。結果としては、だれにも見つからなくてよかったのかもしれない。

父さんは立ち止まって、また魚のようすを眺めた。

ただの魚の死骸なんだけどな。灰色の大きな魚ってだけなんだけど、見てなくちゃいけないよな気がするんだ。おかしな話だろ。死んだ魚だけど、どこか生々しい感じがあって、死んでるけど生きてるみたいなの。

もちろん子供だったからな。ただ珍しかっただけかもしれない。

その時、近くに動物の死骸を見つけた。たぶんタヌキかアナグマだな。四つ足の、丸っこい毛皮が河原にころがってた。

二匹ほどが魚の近くで死んでいて、前の日に見たときはいなかったから、変だと思ってな。溺れたわけじゃない。ふさふさした灰色の丸い藪みたいだったよ。

次の日の朝、今度はまたタヌキかなにか、それに野良犬らしいのが死んでいた。それからキツネ、カラスと死骸が増えていった。だれかが動物の死骸をその魚にお供えでもしてるみたいなの光景だった。

それで気づいたのか、帰りに通りかかると、近くの村の人が何人もやってきて魚を見ているんだ。あの魚を食べて動物たちは死んだんだろう、いや魚からなにか毒が出てるんだろうって。

みんな、河原へは降りていかなかった。

巡査がやってきて、たしかあれは内地の巡査だったと思うけど、木の枝かなにかで河原の死骸をつついていた。

学校の友だちが数人立ち止まって、あれはレンギョだ、いやケンヒだ、違う、あんなに大きいのはソウギョに決まってるって言ってた。だけど、ソウギョやケンヒを食べて動物が死ぬはずがないからな。そういう毒のある魚というのは、川にはあまりいない。

あとで聞いた話だと、つぎの日の夕方、金色の大魚や動物たちの死骸から金色の小魚が何匹も、何十匹も、身をよじり、もがくように外へ出て、金色に輝きながら跳ねて、飛び跳ねて、川へ逃げた。逃げたというんだ。

だけど、父さんが見たのは暗い灰色の魚で、金色じゃなかったんだ。それが金色の魚って話になっただけ。

金色の魚から金色の稚魚が生まれたって。川面が金色になるぐらいの稚魚が生まれたっていうんだ。この川では五十年前にも同じようなことがあった、その百年前にも同じようなことがあったって。山の年寄りがそう言ってたそう。山の男たちもそう言っていた。

たしか二週間ばかりあとにはまた増水して、死骸はすべてきれいに流されてしまったよ。白い骨ひとつ残らなかった。河原にはまた草が生い茂った。

父は話し終えると、そのまま眠りつづけた。かるく開いたままの口から、寝息の音が聞こえてくる。口のまわりの無精ひげはほとんどが白く、角度によっては霜柱のように光った。

寝ている父の口調を考えると、それはわたしたち家族に話しているようだった。大きな魚についての話は今まで聞いたことがない話だった。

池に釣り糸をたらずと、二度つづけて引きがあり、さらに何度か引きがつづいた。

父親が釣り竿をあげると、五つある釣り針すべてに魚がかかっていた。薄暗くなりかけたなかで、その小魚は磨きあげた匙と似た光を放っていた。

「ワカサギだ」と父は魚をてばやく針から外し、クーラーボックスに入れていく。「ワカサギの大きな群れがいるんだろう」

そのあとと同じように、釣り糸をたらずとすぐにワカサギがかかった。三回目からは疑似餌にして数も増やした。引き上げると、疑似餌の数だけ魚がぶら下がった。

わたしたちはほとんど話す隙もなく釣り上げつづけて、クーラーボックスをいっぱいにした。オイル漬けの巨大な缶詰が作れそうだった。それも一つではなく、いくつも。順に並べて、町がつくれるぐらいに。

このあと、大量のワカサギは大量の天ぷらとなった。残りは南蛮漬けと煮付けになった。

釣り竿の上げ下げがつづく限り、ワカサギは疑似餌にかかりつづけた。父とわたしはそれを手早く外し、また釣り糸を垂らした。

ふたりともほとんど話さず、ただ竿を上下させる作業として釣りをこなした。

父は足元に置いた大型のライトをつけた。ライトは右側の岸の藪を白っぽく照らした。池はほとんど暗いままだった。

父はときどき目をほそめ、「うーん」とうなるような声を洩らした。

わたしたちの下のほうにある池は内ポケットのように暗く、釣り糸が落ちるまで水面は重さと硬さを保っていた。薄暗い寒さがぶ厚い手となって池とそのまわりを覆い、まわりからの音を遠ざけていた。

陽の落ちたなかに目がなれてくると、網の目に似た鈍い光がうねりながら右に左にと動き、消えては湧き上がり、さらにひろがっていく姿が薄黒い水のなかに透けて見えた。それはごくわずかなあいだつづき、しばらくするとまたくり返された。

魚たちの動きは途切れずに、音もなかった。そのまとまった動きの下には大魚の濃い影があり、さらにその下には底のわからない黒い水があるようだった。

父は予備の釣り糸などを入れていたビニール袋をあげ、そのなかにもワカサギを入れた。透明なビニール袋はすぐにワカサギで膨れあがった。ほかにはもう容器はなかった。

わたしたちは池を後にした。

あとあとになってわたしがこの時の夜を思い出すと、いつも機械室から聞こえるような低い音をともなった池が見えた。それは周囲のどこから聞こえてきていた。

父とわたしは藪を踏みわけて斜面をのぼり、フェンスを乗り越えた。フェンスは錆がういて、傾いていた。

池のほうを振り返ると、「ここは魚の国だな」と父は言った。

廊下を歩くあいだ、まばらに薄くただよう冷気と消毒薬のにおいを感じていた。

病室に入ると、そこは熱につつまれていた。

ベッドのあいだを通り、窓に近い父のベッドへ向かった。わたしは喉の渴きを覚えた。

父は熱がさがらず、体力を消耗していた。看護師は「さっき解熱剤を出しておいたので」と言う。そのため父はしばらく寝ている、という意味だった。

わたしは窓のそばに座って外を見た。いつものように曇っていて、いつものように車の音だけが聞こえていた。窓のこちら側では、ベッドのなかの父が汗をかかずにかわいた熱を放っていた。

わたしは時間と父の熱が過ぎ去るのを待った。待つのに飽きると、本を読んだ。

一時間ほどすると、看護師が入ってきて熱をはかった。手際がよく、あまり記憶にのこらない若い男だった。

わたしは暗くなる前に病室を離れ、つぎの日もまた同じような時間にやってきた。

熱がひくと、父は眠ったまま話をした。話のあいまには、いびきのような、うなり声のような音がはさまった。父のなかのなかが急に話をさえぎろうとしているような音だった。

父の話が終わった頃に母がやってきた。「なにか食べたほうがいいから」と、手にした買い物袋をサイドテーブルに載せた。父は眠ったままだった。

母は袋から出した王林の皮をむいて、紙皿に並べた。目をさましたあとも、父は手をつけなかった。薄く目をあけて紙皿に目をやったが、またそのまま寝てしまった。皿の上をすべて片付けると、母は父の着替えを取りに家へ戻っていった。

そのあとも父は眠ったままだった。夜になると熱があがるという。

わたしは立ちあがって、窓を開けた。海のほうから押しやられた湿気のもった風が、遠慮しながらはいつてきた。

翌日もまた同じような時間に、わたしは父の病床そばにいた。

眠ったまま、父はまた話をはじめた。

話のなかの父はとりつかれたように河原を歩き回り、魚の骨を探しまわっていた。だれも入らない濃い藪のなかにも踏み込んだ。見つかるという希望があったわけではなかったものの、そこに魚を見たという確証がほしかったのだという。「証拠のようなもの」と父は話した。

父の父、つまり祖父へその話をするために証拠のようなものが必要だったのかもしれない、その父は話した。「これぐらいの大きな骨が見つければ、それを見せられたからな」と言うものの、父は寝たままなのでからだも腕も動かさず、骨の大きさはわからなかった。「証拠というか、説明するものが必要だったのかもかもしれないな。とにかく説明したかったのかもかもしれない」

その話のなかでは祖父はまだ健在で、軍港のある街で亡くなるのはしばらく先だった。越えてはならないといわれていた川を越え、藪のなかを歩きまわり、そうやって父は藪漕ぎを覚えた。父と山へ行くと、たいていどこかで藪漕ぎをする、というのは母の言葉だった。わたしにもその記憶はあった。それは雑草の青臭い匂いと、枯れたススキを押し分けるときの乾いた音だった。

その日の父は目覚めて、本を手にしたまま外を眺めていた。

わたしに気づくとうなずいて、本を閉じた。動きはゆっくりとしていた。父に急ぐ理由はなかった。

わたしはベッドの足元に鞆を置いてタブレットを出し、父に写真を見せた。写真は家族がネット上で共有していたもので、これまで父が撮ったものが大量に保存されている。

「これだけの写真、どうしたの」

「これな、スキャンしてデータにしてくれる業者があるんだ」

わたしがへええとうなずくと、

「写真を送ると、データにして送り返してくれるんだ。メモリーカードでもいいし、ダウンロードでもいいって言うから、ダウンロードにした。メモリーカード、小さいからな」

「どれくらい送ったの？」

「かなり。ダンボール二箱かな」

「そんなに。日付とかどうしたの」

「アルバムとかに書いてあるものとかでだいたいのところを封筒に書いて、それをまとめて送ったかな。それも送り返されたはずだけど。どこかそこらへんにある」

父はベッドのわきのあたりに手を振った。どこかそこらへん、というのは自宅で父がPCを置いているデスクのあたりなのだった。

「これ、ずいぶんたくさんコメントをつけたんだ」

「だいたいの日付とか、場所とか、そういうのを書いとわかんなくなるからな。覚えてるうちに記録しとかないと」

わたしはメモリーカードがカメラに使われ始めたころの父を思い出した。

「メモリーカードって、どうしてどれもこんなに小さいんだ」父はデジタルカメラを買い始めていた。父はレンズ仕事を専門にしていたので、カメラ本体にはそれほど興味を持っていないようだった。レンズ仕事、というのは父だけの言い方だった。父は似たようなレンズをいくつも持っていた。「なにかメモも書けないだろ」

「たしかにそうだね」

「フロッピーなら書けたんだよ」

「大きすぎるよ」

「そうか」

「メモリーカードのケースってなかったかな。メモが書けるような」

「フロッピーは便利だった。大きさも手頃だった」

「あれだってたくさんあると、かさばったけど」

「そうか？」

「壊れたしね」

「そうだな」

それでもすべての写真にコメントがついているわけではない。撮影場所のわからない写真はたくさんあった。山歩きの途中に気まぐれに撮ったらしいものは無数にあり、花や鳥、旅先の風景、おそらくリスポンの街なかのキオスク、どこかの家の屋根、古い看板にもうよく読めない看板、路地裏の奇妙な配管、近所の排水路などの大半にコメントがない。

「写真はどうしたの？」

「だいたい捨てた。デジタルがあればいいだろう。アルバムとかも、がい捨てた」

「がい捨てた」というのは「ごっそり投げ捨てた」ぐらいの意味で父は使っている方言だった。このあたりの言葉のもととの「がい」の意味はいくらか違っている。父は土地の人間ではなく、家族の内では気にせずによく使っていた。わたしたちも外ではその言葉を使わなかった。

わたしが魚を見たのは梅雨の時期だった。

高校に入ると小学生のときほどは川へ行かなくなり、立ち止まって河原を見る機会はあまりなくなかった。その日は川向うへ渡る用事があった。

橋の手前で川へ目をやると、かなり大きな魚が見えた。最初は流木に見え、立ち止まると魚になった。わたしは通り過ぎ、買い物を買ってから川へと降りていった。

堤防にそった道は途中からコンクリートのブロックを敷きつめた護岸となっていて、そのあいだに排水路があった。わたしはそこまで降りた。

魚は排水路にたまった枝や草にひっかかって、横向きになって腹を光らせていた。全長は一メートルほどだった。腐臭はなく、種類もわからない。

わたしは父からゆずってもらって持ち歩いていた小型カメラで魚の写真を撮った。しばらく写真を撮らなかつたので、魚がモノクロの写真になったのはかなり経ってからだった。今も手元に残っていて、ほかの写真はほとんどない。

堤防に戻り、そこから川沿いにある運動場へ歩いた。運動場のまわりを縁取るように丸く堤防が作られていた。自転車でそこを回っている人がいるだけで、ほかにだれもいなかった。

さらに歩くと、ずっと先のほうへ鉄橋が見えてきた。鉄橋もまたモノクロ写真になった。

この頃から、わたしは写真を撮すこしずつ撮るようになった。よく撮るようになったのは、さらに何年もあとになる。

父の興味はレンズにあって、わたしの興味は写真を撮るところにあった。そうやって、それぞれがそういう仕事に就いたのだった。それは枝分かれというより、まったくべつべつの木が隣りあっているだけのようだった。

ふたりでレンズについて話すこともなく、たとえばレンズの歪みについて話した覚えも高校のころに一度あるだけだった。家にはズームレンズもあったが、使っているのはいつも単焦点のものであった。

その頃の撮り方としてはめずらしく、父は思いつくとあまり考えずに撮っていた。狙う、かまえるという形はとらなかつた。記念という考え方もあまりなかつた。shootというところから距離を置いて、写真にはこだわらない、というスタイルをあえてとっているようでもあった。

二日以上の休みがとれると、わたしは電車に乗り、病院へ行った。そうでないときにはfと会うか、ひとりで酒を飲みに行った。

fはほとんど飲まないで、ひとりのときに酒を飲んだ。酒を飲むのは夕方なので、その時間に開いている店を選んだ。ネギと叉焼をあわせたものや、揚げたイカや菜の花を食べながら酒を飲んだ。本を読みながら飲んだり、ただ本を置いたまま表紙をながめて飲んだりした。それから家に返り、子どもたちの食事を作る。

「白和えってあるよね」ファミリア向けのレストランで、後ろにもたれずにまっすぐな姿勢でfは座っていた。わたしのほうは背もたれにうしろから抱えられ、だらしなく手足の力を抜いて座っていた。

「あるね。ここにはないけど」

「白和えを作っているとき、豆腐をふきんで絞るよね」

「そうなんだ」

「あれ、絞ってると、どこまで絞ればいいんだろうなってだんだんわかんなくなってくるんだよ。いつもなんだけど。あれ、ずっと絞れるから。続けていると、このままで水分がなくなって、おからができちゃうんじゃないかって。おからが食べたいわけじゃないんだよなって。どこで止めればいいんだろうっていつも思う」

「白和えはおからじゃないよな」

「そうなんだよ」

「やっぱり料理って、なんとなくの成り行きじゃうまくいかないものなんだろうか。こういう感じ、こういう感じ、こういう感じ、みたいな流れで」

「そうなのかな」

「とりあえずなにかを作るときでも、料理の、いくつかの手順を試すところからやるんじゃないかな」

「ああ、切るとか焼くとか。でも、材料でいたいもう決まってるんじゃないの、そういう手順とか。限られるっていうか。お豆腐を出して、まず揚げようって思わないんじゃない？」

「そうかな。餅を見て、揚げ餅のことは考えるけど」

「揚げ餅？油で揚げてある？」

「そう」

「揚げ餅っていう名前だけ？」

「揚げ餅は揚げ餅だよ」

「あのさ」とfはまじめな顔になった。「その池、探してみたら？」

「揚げ餅を揚げ餅以外に、いったいなんて呼ぶんだ？」

「池の話」

「手がかりがあまりないんだ」

「記憶だけ？」

「それもぼんやりとした、たぶん一つずつ調べないとわからない」

「じゃあ調べたら？」

わたしはそうすることにした。

ふと気づくと、父は寝息をたてていた。口はほとんど動かしていなかったが、話はまだつづいていた。

そういった人の口から出た話が、嘘やそうでないものまざったものがひとつの家、ひとつの町のなかに染みついたものをカタワリ、あるいはカタリと呼ぶ、父がかつてそう話していたものだった。父の口にカタワリがいた。

なにそれ、妖怪みたいなもののなの、とわたしは聞いた。

父はしばらく考え、「そうだな。家つきのなにかかな。家とか町、横丁とか路地、お寺につづくまっすぐな道にいるもの」と答えた。それが遠い外地のものなのか、九州のどこかなのかは聞かなかった。その問いが数十年前から戻ってきた。

カタワリというのはだれかの口を借りて、その土地にまつわる話をする妖怪だという。かつてある者が語り、それをまた誰かが語り、それをくり返しているうちにその土に染みつき、木に取り込まれ、空気となり、人々のなかに沈んでいく、そういう話がある。それがやがてカタワリとなって、まただれか、その土地にいる人の口からその話を語らせる。だれかから聞いたわけでもない話を、かつて語られたように話す。そうして語ったとたん、それはその人自身の話になる。

恨みごとや口にできない話、そういうた強く、揺らがないカタワリはずっと残って、さまざまな時間のあいまにふと、まったくの他人の口からきまぐれに姿を表してくるんだ、と父は話した。開拓地や港町、炭鉱町などにもそういうカタワリについての話があったという。

病院から帰ってもカタワリはわたしの耳に居座り、ずっと話をつづけた。

それはだいたい父と魚の話とレンズの話だった。魚の骨は巡査が持ち去ったといううわさ話と、巡査の家を覗こうと思ったという話もあった。

わたしはそれらを聞きながら寝た。つぎの朝になると、カタワリは消えていた。あとになって病院へ行ったときにその話をすると、「そうか？ そんな話したか？」と父は言うのだった。「知らんな」

父さんは夜になって、こっそり出かけた。

父さんたちの家は工場の敷地に近い、村のはずれにあった。すぐそばまで山が迫っていて、道をまがると人家は絶えた。夜の山には木々のあいだに塊として手で触れそうな闇が、これまで昼も夜もずっとそこにいたかのようにあった。

川のほうへ向かうと、山の男が立っていて「どこへ行く？」と聞いてきた。「どこでも」と父さんは答えた。

もっと歩いていくと、ふたたび山の男が立っていて「なにがほしい？」と聞いてきた。「なにも」と父さんは答えた。

もっと歩いていくと、川へ出た。川べりには大きな魚が打ち上げられていた。今まで見た覚えのない大きな魚だった。とにかく大きい。

魚に近づくと、父さんの父さんの声が聞こえてきた。魚のなかから、父さんの父さんがなにか言っていた。「もう魚はいないぞ」という声が聞こえる。ああ、父さんはすこし小さくなったんだな、とわかった。そうして川を渡った。

あとになってこの話を聞き直したときに、この頃の父の父はまだ亡くなっていなかったはずだと想い出した。

川を渡ると、また山になった。もう山道しかなかった。父さんは山のなかに入った。山のなかには山があり、そのこちら側にも山があった。

山のわきからすぐ次の山があらわれた。後ろからも山がせまってきた。これが「山が呼んでいる」というやつだな、と父さんはすぐに思った。考えずに、そのまま山道を進んだ。見上げると、星が敷き詰められてざらざらした狭いところだけが空だとわかった。それは現れたり、隠れたりした。

山道はどこまでも続いていた。夜と山の区別もつかなくなっていた。空を除くとなにもかもが暗く、手にふれる暖かい夜の空気が闇そのものようだった。歩いていくうちにだんだんとからだも温まり、夜の暖かさとの境目があいまいになっていった。しだいに自分が暗闇の一部になっていく。

手足がどこにあるのかも、もうわからなかった。

父は熱にうかされたようになり、登りだった山道がいつの間にか下りになっていくのにも気付かず、ぬるま湯のような闇を勢いよく歩いていった。元気だけはあった。頭は空っぽだった。やがてふたたび川へと出た。横たわった魚から、父の父が「どうしたんだ」と問いかけた。

「戻ってきたんです」と父は答えた。そうしてまた川を大股で歩いて越えた。あれはおかしな夜だったんだ、と父は眠ったまま話した。

fとはいつもの、住宅地のへりと言っている場所にある喫茶店で会った。

わたしたちは配信サービスで見るサスペンスやミステリーについての話をした。あるいは死者をめぐるドキュメンタリーも話題のひとつだった。

「たいてい連続で人が死ぬね」

「死ぬ」fはくり返しうなずいた。「よく死ぬ」

「やはり死んだ人って、ほうっておけないんだな」

「なんだろうね」

「なんでもそういう気になるんだろ」

「たいていのひとはそうなのかもね。サスペンスやミステリが好きかどうかはともかく」

「だいたいのはね」

「死んだ人というのは社会とのつながりなんだよ」

「死んでるけど」

「つながりじゃなくて、社会そのものかもね」

「生きてる人は社会じゃないの？」

「死ぬと、社会になる。そこによくわからないところがあると、サスペンスになる。よくわからない穴とかもそう。豎穴、横穴。それがなにか知りたくなるのと同じで。その穴は社会でもあるから、ほっとくわけにはいかない。生きていても社会だけど、穴にならないと気にしない。穴になると、社会になる。穴ができることで、そこに社会みたいなものがあるってわかるのかも。なんというのか、穴があることでそこが平面だとわかる、みたいな」

「穴ぼこというのが社会なのかもしれないね」

「みんなが、あ、穴ぼこだなと思えば、そうなのかもしれない」

「いや、社会というのがわからない。社会というのはなんだよ」

「ここにいるふたりから見たら、ああいう人が社会なんだろうと思うよ」わたしはカウンターの向こうにいるマスターを目で示し、窓の外を示した。「あと、あそこを歩いている人たち。今、バスで通りかかった人たち。あっちのビルで昼に働いている人たち」

「じゃ、このふたりは社会じゃないのか」

「いや、ふたりだけだと社会じゃないって話なんじゃないの」

わたしの話す「たいていの」とはほとんどの人がそうでしょう、違う人がいるかもしれないがという意味の上で言っている。fの「だいたい」というのは一部の人にそうでない人がいる、という意味の上で言っているのか、と私は訊いた。

「自分以外の人に興味がない人っているから」とfは答えた。「他人に興味があるみたいに見ても、その人が自分にとってなにか意味がある場合にしか興味がないんだよね。なんかね、自分のなかにすごい重力の点があって、ブラックホールみたいなのがあって、そこに向かってしか考えられないんだよ、たぶん。性格とかじゃないんだよね。話すときもそうだし」

「それ、どこかにいたの？」

「うーん、ときどきいるんだよ。どこかとかじゃなくて」

「その話、社会みたいなの話とつながるの？」

「どうだろうなあ」

「そういう人はどうやって見分ければいいんだろう」

fはテーブルを軽くたたいた。この話はもう終わりだという合図のようだった。人はもつと合図を出すべきだと、fはよく話す。言葉と同じぐらいに合図を出すべきだと。

nはいくらかの騒がしさがないと仕事ができないという。カフェやファミレスにあるような騒がしがないと調子がでない、だからいつもそういうところに仕事を持ち込んでいる。静かなところへ越すまで、それに気付かなかった。

「そういう、おとなしい騒がしがないんだよ」nは顔を斜めにして、残り少ない息を吐き出すように言った。足を組んで体を斜めに向けて座り、テーブルの上の片手はいつもなにかを拭いたり、動かしたりしていた。「静かな場所にいると仕事ができないんだよ。静けさは敵」

仕事が一段落ついたので飲みたい、とnは電話で言った。わたしはファミレスへ出かけていった。ちよと夜の散歩の時間だった。

nは都心に近いところに仕事場を借り、家は妻の実家にちかいところに越したという。けれども、仕事場が静かすぎて結局ファミレスへ行って仕事をしているので、仕事場は引き上げたい。ただ仕事のあれこれ考えると、都心に近いところに足場はほしい。遅くまで飲んだときにも便利だし。

わたしが着いたときにはもうnは飲んでいて、片手はねぎ味噌の入ったうつわをぐるぐる回していた。

「仕事場とはいったいなにか、といった話を彼はしばらくつづけた。わたしについては「家でよく仕事ができるなあ」と言った。

「今だと撮影より、部屋にこもって現像、編集とか加工してる時間のほうが長いかもしれない」わたしは答えた。「あとは整理と分類。机にへばりついてるみたいな時間は多い」

「そういう仕事、多いんだ」

「そういう仕事は多い」わたしはビールを飲んだ。「昔だと暗室仕事だ」

「それは無理だな、そういうのは無理だ」

「ここはけっこう静かだけど、大丈夫なのか」

「あんまり仕事には向いてない。仕事場に近いところだと、わりと深夜でも人がいるから。よくわからないグループとかいるんだよ。宗教なのかビジネスなのか知らんけど。まじめそうとか、熱心なというか」

「両方っているんだろうか」

「両方？」

「ビジネス宗教みたいなの。あるかどうか知らないけど」

「いても不思議がないよ。勧誘っていうか、ただの雑談っぽいけど、服装とか雰囲気があんまり友だちっていう感じでもない。でも、昔いたようなタイプでもない」

「勧誘の人たち、オンラインに移ったっていうね」

「いや、対面での勧誘もまだまだ大事っていう話を聞いたことがある」

「オンラインで知り合った人たちかもしれない、グループの人たち。なにかのファンとか」

「オンラインってなんだ？」向き直って、急にnは真顔になった。

「いや、インターネットの」

「それは知ってる。けど、たとえばな、パンジシールというところで」

「パンジシール」

「そういう名前の峡谷なんだけど。あそこで内戦というのか、があったときに、アフガニスタンはわかるんだけど、パキスタンのデマや宣伝がネットにすごい勢いで流れてて。ああ、こんなところでデマ合戦みたいなのが起きてるんだっていうのを見て、これはなんだろうって。目に見えて、意味もわかるんだけど、まったく違う世界のどれかが作ったものがどんどん流れていく。目に見えない情報があるだろうけど、ポットもあるだろうし、なんの遠慮もない、ただ真贋不明なゴミみたいな情報が大量に流れていく。そうやって、あとはなにも残らない」

「この会話は残らないけど」

「ああ」

「でも、あれは見える。なんの関わりもない俺からも見える。ああやって見えてるものはなんだろうって。見えないところで回ってる世界が見えたみたい。だけど、あれで世界が回ってるわけでもないし」

「回ってる部分はあるかもしれない。というか、それがなにかではなくて、なにかがそこにあるとわかればいいというか。デマでもなんでもいいんだ、そこになにかがあって、ひとがいるのがわかる、みたいなのが。ひとの気配というか、そこから集まるというか」

「そうなのか。よくわからないな。よくわからないと言えば、そうだ」nは思い出したような顔になった。「いや、同じくらいの歳のやつの話なんだけど。山で筆筒に会ったっていう話。このあたりから電車で行けるような低めの山に登るのが趣味のやつでさ」

「山ブーム？」

「うん。けっこう前から山やってみただけだね。それでその日は予定よりも少し足を伸ばしたら、帰りが遅くなって。山は暗くなると速いから。暗くなり始めて、ちょっとあせって急いで歩いていたら、どうも登ってきた道と違う。そんな気がしたんだけど、気が急いでいるから、かまわず下っていた。道はどんどん暗くなる。すると、道のすぐそばに白木の筆筒があったんだ。そう。木の下に。道から数歩だけ離れたところに」

「それは衣類を、着物とかをしまっておくあれなの」

「そう、その筆筒」

「筆筒がいたって」

「それがさ、引き出しがずっと開いたんだって。前を通ろうとしたときに。いや、開いたような気がしたって」

「それは湿気とかの関係で」

「そういうのじゃなくて。違う。気配がしてそっちを見たら、引き出しがひとつ、ずっと開いてきて。いや、もう開いていたのか、そこははっきりしない。こう、なかを見る、これを見ろみたいな感じで」

「なにかあったのかを聞きたくないような」

「筆筒のほうへ近づくと昼間に木立ちにはいったときみたいな、うっすら涼しくなる感じがしてまあよくある話だけど。それで引き出しのなかを覗くと、そこには古びた手紙の束がいくつも詰まっていたんだそうさ、そして湿った新聞紙みたいな匂い、古いペンキ缶の匂い、年老いた桜の幹の匂い、手につかんだ草の匂い、雨の日の地下鉄の匂い、そういうものがわっと押し寄せてきて」

「古い紙特有の匂いというのはあるね、あれは独特だね」

「それでなんとなく手を出しかけたけど、ふと頭に浮かんだんだと。手を出すと、さっと引き出しが閉まるんじゃないかって。あるいはもし手でつかむと、手紙のなかみを読まなくてはならなくなるだろうと。このふたつが同時に頭に浮かんだ。あとのほうがダメだったらいい。変な話だろ？引き出しに捕まるほうがいやだと思っただけ。いやだよな」

「それで？」

「とにかく手は出さなかったそうさ。正気に戻ったというか、道に戻って、とにかく走って道を下りて、いつの間にかもとの道に戻っていたそうさ」

「追いかけてきたりは」

「それはない。いや、なんかすごい怒ってて。そいつな、きちんと計画をたてて、できるだけのとおりにするのを目標にしていたっていうから。つい計画にないことをした自分にも、筆筒にも腹を立ててみたいで。なんなんだ、あれはって腹立ててるんだよ。そもそも道迷いがショックだったみたいで、その状態で筆筒を見たんだろうな。あ、それと手紙がなんだか湿ってる感じがしたのもいやだったんだと」

「一時間経ったので、わたしは家へ帰った。娘たちはよく寝ていた。」

わたしはPCで地図を開き、実家の周囲、歩いていけそうな範囲を表示した。それを画像としてキャプチャし、画像アプリで開きなおした。

地図のなかのそれらしい貯水池、池、浄水場などを円でかこみ、わかりにくいものは衛星画像で確認をした。それから全体を四つに区切る。

円でかこんだ場所は十箇所あり、南東の区切りにもっとも多くあった。町へ流れ込むふたつの川の流れのうち、南側の川に沿った地域に多い。平地にあるものはそのうちの四つだった。

それらに番号をふっていく。どの池にも地図に名前はない。海にちかい場所にあるものは除外した。

ベクターグラフィックスアプリで画像を開きなおし、それぞれの名称の下に四角いボックスを配置し、大きさを調節し、池と関係のないスペースにはメモを書くための白いボックスを置いた。その地図を画像ファイルに書き出し、自分のスマートフォンで見えるようにクラウドに保存する。印をつけたいくつかの場所は記憶に残っていた。

町の南のほうにある小高い丘の周辺には、池はあまりなかった。ふもとには学校があり、そこから丘の上にかけては住宅で埋まっている。川をはさんでその丘と対をなすような位置にある丘陵のてっぺんには、父のいる病院があった。

わたしは病院の地図を見た。ゆるく渦をまくようにして道路が病院へとつづいている。病院のまわりにはいくつかの建物があり、薬局や喫茶店、雑貨店などが並ぶ。

わたしは父が話していたメモリーカードについての不満を思い出し、Greatという画像保存サービスを父の共有リンクから開いた。そのなかから、花や魚といったものを除外し、景色だけを表示させた。

山から町、山道、どこかの木の写真が並ぶ。人の写真はほとんどなかった。

古いものから見はじめたが、すぐにそれは時間がかかりすぎることに気がついた。すばやく見ていると見落としそうだったが、ゆっくり見るには時間がかかりすぎる。しかもなにを探しているのか、自分でもはつきりしなかった。

わたしは実家を出て、とりあえず歩いて行ける場所へと向かった。夕方には自分の家へ戻らなければならなかった。

もっとも近い池は山に近かったが、平地にあって二本の道路に挟まれていた。

池の北側には二棟ずつがセットになった集合住宅があった。前庭には色褪せた物干し竿と物干し台が並んでいる。ほとんどの部屋が空いているように見えた。

わたしはフェンスに沿って池のまわりをまわってみた。池の水面はほとんど見えなかった。最初の文字がいくつか消えた「ですからのぼらないでください」という、すこし憤慨したように見える警告板がフェンスにぶら下がっているぐらいで、あたりに人の気配はなかった。

フェンスの上から覗きこむと、葛が盛り上がっている向こうに池の水面がわずかに見えた。地図の上ではひょうたん型を横から押しつぶしたような形になっているが、全体像はまったく見えない。

施錠されている入り口のまわりには草を刈ったあとがあった。ほかはすべて草地で、池までの斜面は人が腰を落ち着けて座れる傾きではなかった。

フェンスのすぐ向こう側からはじまった葛は、そこから水辺の木々まで覆いつくし、見上げるほどの大きさの緑色の猿人となって肩を寄せあい、頭を突き合わせるようにしていた。

フェンスに手をかけてからだを低くすると、視界のなかは葛だけの世界になった。住宅地のすぐそばで何年ものあいだ、人がだれも足を踏み入れていない場所がフェンスのなかには広がっていた。数十年先にも、その景色は変わらないように思えた。

池の水面から草のあいだを抜け、生あたたかい空気と草の匂いがゆっくりとフェンスのこちら側へと染み出してきていた。

わたしは画面のリストのひとつに線をひいて消し、地図にチェックをつけた。

その日、fはひとりで病院に行った時の話をした。スマートフォンで診察券を登録する方法がわからない、教えてくれと待合室で話しかけられたという。

「きみら、インターネットの言ってることはなんでも信じるインターネット教の信者やろ、ガハハって言ってる」

「ガハハおじさんか」

「いや、インターネットガハハおじさんだね」

「そうか」

「そうだよ」

おじさんとかおばさんに話しかけられやすいんだよ、とfは言う。道もよく聞かれる。道、わかるんだけど、だいたいというか、きちんと教えられてない気がする。それでだいたいな教え方して、自信がなくて、途中でついていくことが多い。そのほうが早いから。

インターネットガハハおじさんにはそれから何度か会ったという。「そもそもQRコードというのなんだ」と聞かれた。説明すると、「QRというのはなんなんだ」と聞かれ、よくわからないと答えると、「そもそもキューというのはなんだ、九番目のなにかなのか」というので

「キューはアルファベットのQ」と答えると、そうか、そういえばそう書いてあったかもしれないがハハ、と納得したという。

そのあと、ここはあのひとでも入院したことがある病院だそうだ、とガハハおじさんはある著名な歌人の名を出して言った。fは「ふうん」と感心してみせた。

「だってほかに言いようがないし」とfは言う。「だけど、それがあんまりっていうか、もうちょっと感心するだろうって思ってたみたいなんだよ」

「それはそうだろうな」わたしは同意した。

「だけど、名前を知ってるぐらいなんだよ、その人。へええ、ぐらいの感じ、昔の人だし」

そのあと「おれもここで死ぬんだろうかねえ」とガハハおじさんが言うので、「そんなふうにはぜんぜん見えないよ」とfは答えた。

「そうなんだよな。おれにもそういうふうには見えないんだ。朝、鏡で自分の顔を見ても、そんなふうには見えないんだよ。どこにもおかしなところ、ないんだから」

「じゃあだいじょうぶだよ」

「そうだよなあ」ガハハおじさんは明るい口調になった。「そういうふうに見えないってのは大事だよなあ」

そのあと、またガハハと笑ってたとfは言う。「病院で名前も知らない人にそんな話されても、あ、名前はヨシなんとかさなか、そういう話されても、病気はなんですかとか聞けないしね。聞くべきなのかな？」

「聞いてもやっぱり困るんじゃないかな。それとも聞いてほしいのか」

「そうなんだよ。わからない。あとほんと言うと、ガハハっていうかワツハハって笑い方なんだよ、ヨシなんとかさなか。あと距離が近い」

「近づいてくるって？」

「なんかね、いろいろ聞こうとしてくるね。いや違うか。聞いたつもりになって、わかったつもりになってるといふか。きみらはそうだろう、みたい。遠慮がないというか。それも違うか」

「鬱陶しくはない？」

「そこまですではないけど。ただ話がしたいだけなんだろうな。アイロンがけウン十年って言った。夏が大変だった」

わたしは自分がおじさんだとして、ガハハと笑うおじさんなのかはわからなかった。「ひとつの土地にひとつのおじさん」という言葉を思い出し、それを口にした。nの話のなかに出てきたのかもしれない。nが言いそうだった。

「なにそれ」

「おじさんというのは土地のような、動かしやうのない、ただほうっておくしかないものなんだってさ。それぞれが別の土地に立っていて、ただそこにぼつんとあるだけ」

「気味の悪い沼地みたいな話」

「そんなにひどいかな」

「ひどい沼地もあるってだけだよ」fはなぐさめるような口調になった。「それはおじさんから見たおじさん、という話なんだろうな」

「そうかもね」わたしは前後の話を思い出そうとした。「土地というか、島を連想したけど。話したひとは土地といていた。なんだろう、ベースというか、どこに立ってるのか、みたいなのなんだろうか」

道路の向こうに低い住宅地と河川敷があり、晴れた日には川をはさんで向こう岸の河川敷もよく見えていた。今の河川敷はすべて川の下になり、木々や草むらが島のように点在しているだけだった。

「なにか見えるか」と父が声をかけた。

「川があるね」

「ああ」

「河川敷もある」

「そうか。城は見えるか」

「見える。もう晴れてるしね。起きて見てみる？」

「いや、今はいい。あとでな」

「ああ、あと花火を上げてる人がいる。打ち上げ花火。音は聞こえないな」

「こんな昼間にか」

「ここだと煙だけは見える」

「花火、嫌いだったろう」

「うるさい音が嫌いだったんだよ。大きな音とかね。あの中華街の爆竹とか」

わたしたちはそのあと、コーヒーマシンの淹れ方について話をした。父は鉄観音ばかり飲んでいて、コーヒーマシンの淹れ方を自分で豆から淹れたりしなかった。「必要があれば、インスタントを飲む」と父は言う。

「そういえば仕事で知り合ったイギリス人が、スープにフォークで文字を書くな、と言っていたな。もうずいぶん昔だけど。そういうフレーズがあるんだとき。よく父親に言われたって。英語だったな。いや、ポーランド系だったかな」

「どういう意味？」

「さあな」

「イギリスじゃないけど、父さんが子どものころに聞かされたので、夜に川を渡るなっていうのがあった。夜に川を渡ると、もう同じところへ戻れないっていう話だった。元の世界にはもう戻れないんだそうだ。そっくりだけど、もうそこは川を渡る前とは違う世界なんだと」

「危ないからってということ？」

「そうだろうな。だけどな、夜に川を渡るようなやつにはなにが起きても知らないっていう話にも思えるんだよな」

「決まりをやぶったやつにはもう戻るところはないってことみたいなの？」

「そうかもな」

父はかつてこの町を好きではないと言いつつ、今ではけっこういい町だと言う。変わった理由を訊くと、「そうだったか？」とだけ答えた。

ずっとあとになって父は「土地とは記憶のことなんだ」というような意味の話をした。それがこの町の話なのかはわからない。

「その人、明日の朝、息子が迎えに来るといふんだけど」fは病院で会った高齢の婦人について話した。

会うのは二度目で、ガハハおじさんと同じように話しかけられてきて、ということだった。fは自分であまり大きな病院に行かないので、付き添いで病院へ行くときさまさまが珍しいという。わたしたちはバス停に立っていた。バスはもうなかった。

「でも、その次に行ったときも検査室のある廊下の椅子にいて。母親がほかの人から聞いたんだけど、腸炎で五日ほど入院したあと、息子さんが迎えにくるときに事故で亡くなって。そのショックなのか、病院の階段で転倒して、足首を骨折しちゃって。そのまま一ヶ月ほど入院してんだけど、それ以来、明日の朝、息子が迎えに来るといふ毎日を過ごしているんだって。いや、ただの又聞きだけど」

「いづれ施設に入ることになるんだろうか」

「そう言ってた。本人はともうれしそうに話してるんだけど」

「それはそうだろうな」

「話してると、なんだかもやもやして」

「話がちゃんと通じないとか？」

「手をさしのべなくちゃいけない、というのでもない。そういう気持ちもあるし、そういう話でもないってわかっているけど。つまり自分の問題なんだろうけど。べつの時間がそこにあるみたいな」

「手が届かないみたいなきな」

「そうかも。声が届かないっていうのかも。気の毒とかそういうんじゃないんだけど」

「でも記憶がそんなに続かないのなら」

「でもこれって、べつにあのおばあさんのときにだけ感じるわけでもないんだよ」

「そうなのか」

「この話、まだ続くと思う？」 fはわたしのほうを見た。

「どうだろう」

「続くと思うんだけど、飲み屋にでも入る？」

「ビールかな」

「オーケイ、ビール」 fは先に立って歩きはじめた。「よし、ビール」

ビールを待つあいだ、ふたりは熱心にメニューを見た。メニューはカラフルで巨大だった。

ビールはすぐに来た。fは話を戻した。

「あのおばあさんには、あの人だけにだけの時間があるんだなって。それがもやもやなんだろうなって思ってる」

「それは高齢者によくあるような時間っていうこと？ 閉じた時間というか」

「どうか、もっと普通の。他人って全然べつの時間を生きているってことなんだなって。時代とかそういうのもなくて、みんなまったく違う時間を生きているんだなって」

「べつの世界ってことなら、それはそうだろうけど」

「いやあ、世界じゃなくて時間なんだよ。なんだらう、軌道が違う星みたいな感じ？」

「へええ」 わたしは数百、数千の星が混み合った軌道を描いて飛びまわっている様子を頭に浮かべた。それは美しいというより、宇宙規模のからまった毛玉のようだった。「そう考えると、なんで話を通じることがわからなくなるな」

「そうなんだよ」

「話に通じてないかもしれないな」

「そうなんだよ」

わたしは追加でビールを飲み、fはビールはしばらくいい、と言った。わたしは上の子に連絡をした。

父さんが小さいころに見た魚は、背丈より大きかった。

それはどっしりした灰色の魚で、増水したあとの河原に打ち上げられていたんだ。学校へ行く途中、まだ濁った川の水がいきおいよく流れているのを見ているうちに、倒木なんかに混じって大きな魚が横たわっているのを見つけてな。

つぎの日の朝になると、魚は食い荒らされていて、そのまわりには動物の死骸がいくつも横たわっていた。

四つ足の動物からカラスに至るまで、あの魚といっしょに打ち上げられたのかっていうぐらい、いろんな動物が魚のまわりで死んでいたな。それでもう人が集まったり、巡査がやって来たりして。

あの頃の巡査、小銃持ってて、怖い感じだな。

そのあとだったけど、父さんの友だちが川向うの山へ釣りに行って。

そこで倒木だと思って乗り越えたのが、おそらく蛇だったんじゃないかって。

あとから考えたら、倒木は蛇の胴体で。それで蛇の毒気にあてられたせいかな、山から帰って二日ほど寝込んだそうさ。部屋のすみからずっと蛇に見られているような、いやな夢を見ていたんだ。毎日汗だくになって。

あの魚も、あれも蛇だって言うんだ、その友だちが。

ときどき、魚のなかに隠れている蛇がいるんだと。ウオクイヘビという名前の。大きな魚になると、そういう蛇が自分のなかにいるっていうの、気がつかないっていうんだ。蛇はそこで呑みこまれてくる魚を待っているわけだ。

それから、ひとのなかにも蛇がいるって言うんだ。

その毒でその子の父親は亡くなったんだ、黒水病というので死んだ、高熱を出して死んだんだと。ああ、そういう病気があったのは、ほんとだけだな。すごい顔になって。その子は。それからしばらくして内地に帰ってしまった。

いや、そのあとはわからない。うん。

だけど、山で蛇に遭って、それで家に帰ってから熱を出した、寝込んだっていう話は内地でも聞いたからな。そういうたぐいの話があるんだろうな。
父さんはあの魚がどこへ行ったのか、しばらくのあいだ、ずっと探していたんだ。

(前半了)